

# 田口洋美さん

(狩猟文化研究者)

## クマ問題が突きつける「攻めてくる森」

山菜やキノコ採りに行った人が襲われたり、住宅地に出没したり、クマをめぐるニュースがめつかりと増えてきた。なぜ突然こんな状況になったのか。どう対処していけばいいのか。緊急出版された『クマ問題を考える』の著者、田口洋美さんに話を聞いた。

——山で人がクマに襲われたり、住宅地に入り込んだクマを射殺したといった報道がこのところ目立ちます。それで、自分が山を歩くときの用心として田口さんの『クマ問題を考える』を読んでみたら、クマに出会ったらどうすべきかはあまり書いてなかった(笑)。どうしたらクマに出会わないようにできるかを社会全体で考えよう、という趣旨の本だったんですね。

——とにかく、クマと出会ったらもうアウト、ですからね(笑)。何もされずに無事帰れたら、それは運がよかっただけ。出会わないようにするしかありません。

——最初にちょっと聞いておきたいのですが、死んだ

ふりをするとか、クマ鈴を腰にぶら下げて歩けばクマが逃げるとかよく言いますが、どうなんですか？

死んだふりをして襲われた人もいるし、クマ鈴は人間がここにいると教えてしまうので、向かってくるクマには逆効果です。クマが相手だと、こうしたら絶対に大丈夫だという方法なんてどこにもないんですよ。

——普通の人は、山を歩いていてもクマの気配にまったく気づかないものなんですか？

クマが藪の中に身を潜めてしまうと、至近距離でも気づかないでしょう。僕はマタギに同行して何度もクマ狩りに参加してきたので、これまでに数百頭のクマ

の亡骸を見ているし、生きたクマも何十頭と見ています。おかげで、そこにクマがいるという空気みたいなものが、なんとなくわかるらしい。

——以前、ロシアのアムール川中流域の村で調査をしたとき、同行者たちがほとんど先に行ってしまうのに、急に足が重く感じられて、先に進めなくなることが



●たぐち・ひろみ 1957年茨城県生まれ。民族文化映像研究所の記録映画制作に助監督として参加し、新潟県のマタギ集落・三面(みおもて)に長く滞在して生活誌を記録。それをきっかけに狩猟文化の研究を志す。日本観光文化研究所を経て1990年から「マタギサミット」を主宰。現在は東北芸術工科大学教授。主な著書に『越後三面山人記』『おんな猿まわしの記』『マタギ』など。

何度かありました。なんか変だな、何かがいる……。で、ふと見るとヒグマの足跡があったり、一、二分前にしたばかりの糞があったりするんです。

——なぜ田口さんだけ気配がわかるんですか？

経験を積んだからとしか言いようがないけれども、おそらく臭いに体が反応したのではないかと思います。でも、経験のない人がクマの臭いに気づくのは無理ですから、その土地をよく知っている地元の人などから話を聞いてください。クマがいるところはほぼ決まっています。そこに行かないようにするのが第一です。

### まだまだわからないクマの生態

——今年は山のドングリが凶作だからクマが里に食べ物を狙って下りてくる、などという解説をよく目にしますが、本当でしょうか？

クマの出没は四月から六月にかけての春期と、九月から十一月にかけての秋期に大別できます。たしかにドングリはクマにとって秋の貴重な食糧源ですが、クマは雑食性で、ドングリだけを食べているわけではない。しかも、過去にもドングリの豊凶は当然あったの